

書 後 余 滴

一、論考と随想

私の研究の専門的な分野は、わが近代文学に関するものであった。昨今では、よくもこのような面倒な地味な仕事が続いた年月つづけられたものだ——といった感懐が胸に去来する思いがしてならない。

その最も簡単なものは、ある作家の一つの作品について、自分の研究をまとめるような仕事である。その作品を心をこめて深く味読し、こまかなノートをとる。登場人物の性格や心理を解析し、その作品の全体的な構想を探って

坂 本 浩

ゆく。そして、作品に対する総まとめや、論考のテーマについての見通しなどを立ててみる。さらにその腹案を明確にするために、そのころ書かれた随筆・日記・書簡・断片などを読んで、作品の背後にある作家の実生活などを具体的に究めようと努める。最後に、これまで発表された研究論考を参照しながら、自分の考え方の適・不適を計ってみる。こうした操作を繰り返しながら、おもむろに下書きに辛うじて辿りつけるのだ。

これは一つの作品に限った場合であって、その作家の全体像を研究しようとすれば、その何十倍、何百倍の労力が必要となるか、考えただけでも、うんざりさせられるので

ある。一冊の本にまとめあげるのには、何年という歳月をかけ、明け暮れそのことに没頭しなければならぬ。多忙な勤めを持つものにとっては、与えられた休暇がその唯一のチャンスとなるのである。休暇という文字そのものが逆説的な意味を持つことになる。昭和七年に大学を卒業して以来、ふり返つてみると、とにかく私はそういう思いをしながら、長い人生の道を辿ってきたようにも感じられる。このことは、本質的にいって、私の生そのものと、いったいどのような関係を持っていたのであろうか。

同じく学的研究といつても、医学とか、このごろはやりの高度技術科学とかいったものは、それが人間の実生活や社会生活と密着する面が多く、人々の健康増進や、人類の文明生活などに直接に寄与することができる実利的な性格に富んでいる。けれど、人間の精神的な面、それもさらに特殊な文学などというものは、「男子一生の事業とするに足らず」といった狭い範囲に限られている。当人は苦心惨憺、大きな仕事をしように思っているかもしれないが、こうして世に送られた労作も、せいぜい仲間の感想などが寄せられるにすぎなくて、いったい誰が読んでくれて、どのように受けとったかなどということは、多くは分からず

じまいになるのが大部分である。そこに本人が意識するところがないとは係わりなく、胸の奥底にいうにいわれぬ空虚感が潜在することを避けるわけにはいかないのである。

やがて私も八十歳を迎える。二十歳まで生ければ幸運だといわれたほど虚弱であつた身としては、望外の長生きと考えざるをえないのである。たまたま作品を読んでみても、平面に印刷された活字が、妙にデコボコに見えてくる。努めてそれを追うてみても、頭の中に沁みこんでくるのは容易なことではない。若いころは、活字が自分から秩序正しく整列して体内に進入するように感じたものだが、われながら老化現象の実体を自覚しないではおれなくなつた。このまま進めば、老人ぼけになるのではないかと恐れられたりする。その昔書いた論考が、自分とは何の関係もない他人のような気がするのである。ついに思い余つて、いわゆる研究といった、おごそかな営みに見切りをつけてから、もうかなりの歳月が経ってしまった。それを嘆く気持ちすらも、どこかに消失した今日このごろの心境である。

弁解じみたことばととられるかもしれないが、そこには研究論考というものが本質的に持つている性格があるよう

な気がしてならない。それは、この作業はあくまで頭のみの範囲に限られたもので、もっと広い意味での心とか、生そのものとか、そういうものとはあまり関係していないという意味においてである。私の現実の生活は、知的に思考することだけではなく、その大部分は感情が働いたり、行動したりして生きているのである。むしろ、その方がわが生の実体であるという気さえする。机の前に正座して、こむずかしい理屈をこねまわしているのは、ある特定の時間だけであって、平凡人にすぎない私は、些細なことに腹を立てたり、喜んだりしながら、しゃべったり、動きまわったりの日常の生きかたを繰り返しているということに気づかせられる。実はそれが生きるということであって、知的な面より、より多くの情意の側に力点があるように思われてくる。

現に私という存在は、知的な研究といったことから遠ざかっているが、感じたり、思ったり、行なったりしたことを、その都度メモ帖に書きつけてみるという作業は、毎日のようにつづけているのである。それは親しい人への手紙であったり、わが心との対話である日記風のものであったりする。何のためにそんなことをするのか、はつきりし

た目的もないが、とにかく、それによって私の情意の生活が客観的に残されてゆく。これが一般に「随想」と呼ばれるものではないかと思われる。つまり、一言でいえば、私の筆は論考から随想へと変化してきたことになるう。

論考というものは、学界とか同学の士とかいったものを対象にするもので、対外的なものである。したがって、そこには自己を売り出したいとか、有名になりたいとかいった心根が必ず付帯してまわる。これに対して、随想というものとは、われとわが心との対話であって、対内的な性格のものである。人に読んでももらえればありがたいという気は、人間の常としてないわけではないが、本来はわが心の満足を目ざし、わが生の充実を願ってするもののように思う。

その根本にあるものは、生まれた故郷への回顧であり、わが心のふる里への懐旧の想いに通じるであろう。ことに老境に向かうにつれて、私の内面にはそういうものへの感謝の念がいっそう強く湧き起こってくるのを抑えきれなくなった。わが生を育み、私に人の世のえがたい幸せを感じさせたものへの感恩の気持ちを書き残しておきたいと切に願うようになってきた。その結果、生まれ出たも

のが、今度の随筆集となったのである。

そして、限定自費出版の形をとって、そういう恩恵をめぐんでくださった方々の机上の一隅に贈呈することを思い立ったのである。もし、何かの暇の折にでも、読んでいただいて、余生少ない私の心情を汲みとってもらえたらとの厚かましい願いもどこかに持ちながら……。

二、個性の尊重

大正から昭和へと改元されると、いわゆる学歴社会というものが根づよく定着するようになった。したがって、大志を抱く青少年の夢は立身出世という一事に賭けられざるをえなくなった。できれば歴史の古いナンバースクールの旧制高等学校に入り、さらに進んで東京帝国大学に進学する。ぬきんでた成績をおさめて、高文（高等文官試験）にも上位で合格し、官界への進出を企てる。生涯を他の人々と競争し、それらに打ち勝って出世する。こうして功成り名遂げて故郷に錦を飾る。このようなコースが一般に求められた男子一生の事業の名に価するものであった。その必要条件は、何よりもまず生まれつきの頭脳の明

晰さであり、さらに絶えざる努力の積み重ねであり、それに加えて困苦に堪えて人々に打ち勝とうとする闘争心であった。「堂雪の功成る」ということはそれがそれを証するごとくである。

私が熊本の旧制第五高等学校に入学したのは、大正十五年（昭和元年）の春であった。一組約四十名の編成であったが、黒板に向かっていちばん右側の列の最後尾の席がクラスで一番の秀才であった。順次に二番、三番と前に腰かけ、右から二列めに移ってゆく。したがって、最も左側の前方に落第組の連中は坐わらせられていた。二年つづけて落ちると退学になるので、一年おきに原級になれば六年間は在籍することが許されていた。出世を目ざすものたちは争って右側の後方に席をとるようにおのずから奨励するといった配置である。髭を生やして応援団長をつとめたり、大学にあがることはあきらめて満州の馬賊の群れに投じたり、カンニングが見つかって合口を喉元に突き当てて自殺するとわめいて教授をあわてさせたりするような輩は、ことごとく左側の窓に近い明るい座席にがんばっているのであった。

こんな中であって、右側にはついてゆく気はなく、左側

に組する蛮勇も持てなかった私は、クラス中でただひとりだけ、好きな文学の道に進もうとひそかに決意し、興味のある学課だけは夢中に勉強し、そうでないものは敬遠して辛うじて合格点をとるだけに止めるという身勝手なことばかりやっていた。自ら好んで日の当たらない裏街道を歩いてゆくという風変わりな行路であったといえよう。母ひとり子ひとりの境遇だったので、あまり丈夫でもないわが子の進路としては仕方がないと母も半ばあきらめていたのかもしれない。

こうして、ともかくも東大国文科を卒業した私は、昭和十年に七年制高等学校であった成城学園に勤務することになった。そして、これまで私の通ってきた官公立の学風とは、あまりにも異なった独自の空氣に触れて、初めは驚かされてしまったのだった。やがて、その驚きは敬愛の念に変わり、ついには真に教育の原点はここにあるという信念にまで発展してきたのである。その後、定年退職するまで満四十三年間でこの中で過ごされ、形態は新制大学に変わっても、ずっとつづくことができたのは、このような学園への切実な愛着と、私のようなものに働く喜びを与えてくれたことに対する感謝の念の然らしめたものといえる。

思う。

この学園の組織上の最大の特色は、何といっても連絡学校制による一貫教育という点にあった。幼稚園から高校・大学に至るまで推薦による進学の形をとっていて、ふつうに学習していれば無試験で上へ進めるという特権が与えられるのである。したがって、入学試験のための点取り式の勉強といった、第二義的な功利的な詰め込みなど必要がなかった。延ばしたい学力は自由につけられるし、時間の余裕によって教養や趣味やスポーツなどにも打ち込むこともできるのである。学園全体が自由で明るい雰囲気を持ち、学生たちもコセコセしないで人間味豊かな連中が多かった。私がこれまで自分のまわりに見いだしてきた人々とは、全く種族を異にするものに出あうような気がしたのである。

この学園は当時一般の風潮であった知育偏重の学風に対して大きな不満を持ち、個性尊重の全人教育を目指して創設されたという。単なる知識のみを追い求めるのではなく、人間として大切な面である情意をもかね備えることを理想と考えるのである。知育偏重の武器の最大なものは、頭がよいこと、物覚えがよいこと、記憶力のすぐれている

こと、であり、それが立身出世を目ざす学生の願いであった。何よりも試験においてすばらしい点数をとることにすべては賭けられるのである。

もしそうだとすれば、それに対立する個性とは、知的なもの一辺倒ではなく、情意的な天分を重んずるものと受けとるのが一般的の考えかたであろう。情意の方面における特殊な天分を延ばすこと、平たくいえば一種の天才教育といわれるものが浮かんできるのである。私自身も初めはそんな風に受けとっていたようである。実際においても、特に芸術方面——音楽・絵画・文学・演劇・映画などすぐれた天分を発揮しているものが、学園の卒業生の中から数多く出ていることは否定できない事実である。

私は個性尊重ということを、そのように漠然と思いこんでしまつて、ここでいう個性とはどんな内容を持つものかということとは突きつめて考えなかった。いや、考えることはあつても、その実体は複雑きわまるもので、とらえどころのないもののように感じていた。その程度でお茶を濁してしまつた。その点を徹底的に究明しようとはしないで過ごしてきたのである。それが、いよいよ学校から離れた身となり、しきりに過ぎにし日々を追慕するような氣に駆ら

れる今日このごろになって、改めて問い直したい氣が自然に生じてきたのである。

静かに過去を顧みるとき、私はこの学園の教育の実体は、特にそういった情意的な天分を延ばすことを目標として、特殊な指導がなされたことは皆無であるということに氣づかせられた。少なくとも私自身が身をもつて経験したことは、一種の天才教育といったものに出あつたことは全くないということである。この方面で天分を発揮できた卒業生も、時間的に余裕があつたので、勝手に好きな道にひとりで入りこんでしまつた結果、おのずからそうなつたのであつて、個性尊重の名のもとに、そんな専門的な指導などを学園が行なつたのではないというのが事実である。

こうして私は、個性尊重ということは、そんな特殊な天分の開発などと考えてしまふことは、大きな誤解に陥ることを、改めて反省せざるをえなくなった。そして、實際教育の面に即して、このことはどのような形をとつて実施されてきたかを顧みることにした。そこで氣づいたことは、個性ということばは、もっと一般的な意味、すなわち、人にはそれぞれ違った性格があつて、ひとりひとりが独自のものを持つて生まれ出てきたものであるということではな

いかと考えられるのである。

当時の一般の風潮は、人間の複雑な性格の中から、單に知的な才能という抽象的な理念だけを抜き出し、ただその物差しによって、すべてのことを割り切るといふ傾向であつた。今日の偏差値一辺倒の考えかたの出発点である。

これに対して、生きた人間をコンピュータのように物としてとらえ、機械的に計算してしまふやりに反逆して、人間を生きた精神を持った存在として認識し、人それぞれに個々の異なる可能性を備えた生命として考え直すことが、個性尊重の立場といえるのではなからうか。

生きたひとりひとりの人間は、神でもなければ悪魔でもない。プラス面もあれば、マイナス面もあるのが、その実体である。個性尊重の立場は、そういう人間の実情を正確に見ぬくということから始めねばならない。それにはマスプロの教育ではなく、必然的に少数教育を必須とするのである。そして、そこに教えるものは、教壇の上から單なる知識を詰め込むコンピュータ的存在であつてはいけない。個々の学生の傍らにあつて、そのものの持つプラス面をいかにして引き出すかに苦心する *erzielen* する教育者でなければならぬであらう。いわゆる自学自習の形態を

とつた教育精神は、そこに基づいているのであらう。

頭がいいということは、多くは親から受けついだものである。この一点だけで人間を評価すれば、知的才能に恵まれなかつたものは、永遠の敗北者になる他はない。けれど、たとえ知的な天分に劣っているものでも、その反面、かえつて他の才能では優れたものを持っていることだつてあるものである。その歩みは遅々としていても、絶えず努めて止まないという意志力は非凡なものもあるであらう。

あるいは、頭はそれほど鋭くはないが、美に対する感受性は無類のものを備えていることもあるだらう。その他、愛情が豊かであるとか、人との協調性に富んでいるとか、思いやりがこまやかであるとか、そういった人間味にすぐれているものも見いだされるであらう。こんな隠れた、偏差値では見捨てられてしまふが、将来の社会生活には不可欠な特殊な才能を発見し、それを引き出し、どこまでも延ばしてやる教育が、個性尊重の真意ではないか。

私が学園に勤めてみて、実際に経験した教育の実体には、確かにそういう精神が生きて流れていたことを否定できないように思う。單に知的な物差しだけによつて、点數上の優劣をつけ、それについてゆけないものは切り捨てて

しまうのではなく、そのものの持っているあらゆる可能性の中から、できるだけプラス面を見つけたし、そこにその学生固有の価値の標準を設け、それを伸長するように細かに導いてゆくというやりかたである。

そこにこそ、当時の知的偏重の教育に対峙する、成城独自の立場があつたのではないだろうか。個性の尊重、全人教育、情意の重視、などいわれたものも、つまりはそこを指すものと考えられるのではないだろうか。そのように考えてくると、私の過去の教育体験も矛盾なく受けとれるように思うのである。

三、事実と真実

事実と真実という二つの語は、一般的にはほぼ似たような意味に用いられることも多いが、文学上のことばとしては区別するのがふつうのやりかたである。わが近代文学史上において、明治後期に自然主義の運動が盛んになり、小説・心境小説・告白小説といったものが主流を占め、文学作品は作者自らが実際に体験した事実をありのままに暴露したものと限定することが流行し始めてから、事実を重

視することが叫ばれるようになった。これに対して、非自然主義と呼ばれる一派があり、事実をそのまま描出する態度に不満を持ち、^{こじ}拵えものであつても、その中にいかにも本当らしいもの（真実）を創造する方法こそ文学の本道であり、真の創作の名に値するものであることを主張するようになった。

事実を Fact と呼ぶとすれば、真実を Reality と呼び、創作としての文学作品は単なる事実の再現であつてはならず、虚構による真実の創造でなければならぬと説くのである。こうして事実尊重と対立して真実重視という立場が生まれ、その後の文学作品は、多かれ少なかれこの二つの対立する思潮の影響を受けて展開するに至るのである。

これは文学上の問題であるが、私はこのような事実と真実という根本問題を自らの生活の中で経験し、今なおどう解決したらいいか迷っていることがある。それは旧制高校における進級会議の席上に起こった、今から半世紀近くも昔の出来事がその契機となった。

先にも触れたが、この学園の高等科の学生は、のびのびした余裕のある生活を楽しむものが多くて、点取り虫的な存在はほとんど見いだされなかった。そんな学生にとつ

て、最も頭の痛いことは、学年末における進級問題であった。そのための会議で落とされでもすれば、一年おくれで他のクラスに入れられ、親しい仲間たちと別れてしまわねばならなかったからである。他方において、その組の担任である教授は、一家の中から可愛い子供を放逐せねばならぬことになるので、全力をふりしぼってその学生の弁護に当たるのである。したがって、進級会議は午前が始まり、午後を通して、夜おそくまで長時間に及ぶのが常であった。

その会議の行われている夜に、自分の結果が心配でたまらなくなった一候補者が、木の上に登ってひそかに二階の会議室のようすをのぞき見しようとしたことがあった。それに気づいた一教授が突然立ちあがって、カーテンと窓を一気に開いて、外に向かって大声で怒鳴りつけたのである。びっくり仰天したその学生は木から落っこちて地上に尻もちをつくという思いがけない珍事が生じたことがある。この場面は私の長い教師生活の中でも忘れがたい思い出として残り、そのときのことを今度の随筆集にも書きとめたのである。事実と真実との微妙な問題を考えねばおれなくなったのは、その後日譚のためである。

私はそれ以来ずっとその時大声で怒鳴りつけたのはO教授だと思い込んでいた。私の眼底にはカーテンを横切った小柄の後姿が焼きついてたし、私の耳底にはボーイ・ソプラノともいふべき甲高い声音が今も聞こえるような気がしていたからである。ところが、その当人のO教授から寄せられた手紙の一節には、あの時大声で叱りつけたのは小生ではなく、H君ではないか、そう記憶している——と書かれていて、一読して私は心の底から仰天させられてしまった。それこそ、木の上から落っこちた学生以上のショックだった。何よりも当の本人がそう言われる以上は、これは動かしたい事実、実に違いないと考えたのである。とすれば、飛んでもない迷惑をかけてしまったと後悔して、その日の夕方、早速電話をかけて、失礼をお詫び申しあげた。

O教授は、自分もその昔思い違いをして書いてしまった経験があるという長話をされ、そのことでいろいろな複雑ないきさつがあったことを縷々として話されるのだが、こちらは私の失敗についてどんな反応を寄せられるかということで頭が占領されていて、くわしい筋道など聞きとれなかった。長電話は二、三十分もつづい後に、やっと結論が

返事としてかえってきたが、今度のことは大したことではないので、そのままにしておいてもかまわない——という有難いおことばに、私はホッと安堵の溜息を洩らしたのである。たとえ訂正しろといわれても、拙言汗の如しで、今さらどうしようもなかったからである。

その後、どうにか一応事件は落着いたかに見えたが、私の心には大きな疑問がわだかまり、その解決の緒すら見いだされないで、今もって心の安らぎがえられず困っている。いつたい、いつの間に、どんな経過をとって、事実が虚構へと変化し、私の心に真実感を生み出すに至ったのであろうか。どう考えてみても皆目見当がつかないのだ。O教授の名指されたH教授というのは、学生の風紀を取り締まる学生課の有力なメンバーのひとりである。その時もそういう言動をとることがあっても、きわめて自然な成り行きといえる。だが、このH教授は体格もがっちりしていて、背も高く、声調はむしろバスに近いのである。それなのに私はいつの間には、それを小柄でボーイ・ソプラノに置き換えてしまい、似ても似つかぬO教授と勘違いをしたのである。こんな不合理な心理的操作が、どうして生じたのか。筋道立てて解析できる人があれば、私の蒙を啓いて

もらいたいと願わずにはおられない今の心境である。

ついでに記しておくが、このH教授の遺歌集を、私の本のお返しとして未亡人からいただいた。直ちに拝読したが、実に繊細な、やさしい心情に満ちた歌の数々が詠じられていて、私の従来のH教授像とは全く正反對な奥ゆかしい人柄がしのばれてきたのである。人間を外貌や言動のみで判断することのいかに誤りであるかを痛感させられたのである。もともと、自分自身の心の働きすら本当には分からない私ごときに、他人のことなど見ぬけるはずもないわけであるが――。

これらの経験は、私に事実と真実、かつてあつたことと、ありうることとの微妙な係わり合いを顧みさせる契機となったことだけは動かすことのできない事実即、真実であるように思うのである。

四、主観と鑑賞

長年月に及ぶ学園生活がつづいたので、私が担任した卒業生で最も古いものは、すでに六十代も半ば過ぎといった連中である。一緒に写真をとると、だれが旧教師だか見当

がつかないさまである。喜寿を迎えた年の誕生日にクラス会を開いて、アルバムにひとりひとりのカラー写真をはり、その左側のページにはメッセイジを書いて贈ってくれたことがある。その中にH君という卒業生があつて、九大の国文科を出て、定年までNHKに勤めあげた温厚寡黙な熟年紳士は、

喜寿迎え 夫人の足みて 町歩く

という俳句を記していた。三行書きで、改行ごとに少しずつ下に下げた書き方である。

そのころ私は家にこもりがちで、老妻が無理に散歩に連れ出すのであるが、いつしか背を丸め前屈みになって、その後からしおしおとついてゆくことになる。近くに住んでいたH君はその様を目にしたのであろうか。読んでいるうちに、老いさらばえた二匹の宿なし犬が雨に濡れて迷い歩く姿を連想して、思わず吹き出してしまった。老妻もつい釣りこまれて笑い出したのである。

ところが後になって分かったことだが、この俳句の基は、君自身のことを詠んだもので、あるとき町を歩いてい

て、ふと振り返って妻の足元を顧みたときの情景ということであつた。私は俳句の世界には、とんと縁のない不風流な男であるが、強いてH君の心境を想像してみると、こんな情景が浮かんできた。

秋涼^{すず}や 妻の歩を顧^みて 町あるく

(夕食後のひととき、郊外の通りを散歩していると、しのびよる秋の気配がふと身に沁みて感じられた。思わずも妻の足元を振り返ってみたことであつた。)

熟年夫婦の思いやりに満ちた愛情を詠じたもので、作品例は別問題として、名句の境地と称すべきであろう。贈られたのは無礼講の酒宴の席であつたし、その雰囲気にすっかり酔わされて帰宅した私は、勝手千万にも、これをユーモラスな狂句と勘違いをしてしまい、雨に濡れしよばたれた宿なしの二匹の犬を連想するとは、まことにもって失礼な仕打ちであり、往年の教師の名を恥ずかしめる不明の所行といわざるをえないところである。もつともH君も咄嗟の場合の執筆に困って、自分たち夫婦の情景を私にも応用

して作りかえたのであろう。私は私で勝手な感情移入をやってしまい、老衰のあわれな姿と受けとってしまったのである。

作品鑑賞というものは、どんなに客観的になされたとしても、所詮は享受者の主観の作用にすぎないもので、自分では正しく味わったつもりでいても、飛んでもない誤読や誤解を犯すことも多々あると思われる。この拙文の初めの方に、「その作品を心こめて深く味読し」などと私は書いたが、私が作品研究の名のもとに発表した論考の中にも、こういう恐るべき誤読をやってしまい、作家にとっては迷惑千万な失礼をあえて加えたことも一再ならずあったのではないかと顧みられる次第である。もしそうだとしたら、作品・作家論など早々に見切りをつけてしまったことは、かえって賢明な処置であつたという思いも否定できないわけである。

それに代わって随想を書き出したのであつたが、その最初に発表した思い出そのものが、事実を曲解した虚構の記事にすぎないと思つては、物を書くという行為そのものが根底から揺らぐことにもなりかねない。結局、老人はけ直前のあわれな身にとっては、筆なんか捨てて念仏でも唱え

ているのが最もわが身にふさわしい行為かもしれないのだ。

H君のことに戻ると、まことにもつて教師失格と申す他はない始末であるが、かつての恩師としての体面を何とか保ちたいという虚栄心も残っていて、一言だけ書き添えることにする。それは、動詞十て（助詞）＋動詞、という形は、前と後との動作が同時に進行する場合も多いということである。「大を連れて散歩する」とか、「弁当持つて、学校に行く」とかいったような場合は、二つの動作は同時に行われているのが普通である。

したがって、「妻の足見て町あるく」という表現も、私には足を見ながら歩いていっていると受けとられたのである。そこには人通りの多い町中で、老妻の姿を見失わないように後からついてゆく私自身の実地体験が作用していることはいうまでもないが、「ふと振り返って思わず妻の足元を見る」という情景とは解しにくいとも考えられるのである。

H君はその微妙な境地を活かすために、わざわざ改行して、少し下げて書くといった形式をとつたのであろうか。それにしても、初めを「喜寿迎え」と改作したところに無理があり、誤解の原因があつたのではなからうか。

そのH君は私宛ての手紙の終わりに、「これからは町を歩くことは止めますので、雨の日もお二人でそろって出かけください」と結んでいた。これこそ、出藍のはまれあり、と称すべきものと感じ入った次第である。事の序でに、この師にして、この弟子あり——と付け加えて、喜寿を祝ってくれたH君の心情をありがたくお受けすることにした。

あえて「書後余滴」という。正岡子規の「墨汁一滴」にあやかるわけではないが、随筆集を出した後の、とりとめのない私事を記して、「七十周年記念号」の責めを果たすことにした。というのも、これは創立後二十年ごろの旧高時代に関する想い出であり、その昔の学園の面影をしのぶ縁にもなろうと思ったからである。それに加えて、長年月にわたる学園から受けた恩恵へ対する私のささやかな感謝の気持ちにも通じることができれば、望外の幸せと思うのみである。

(六十一年晩冬)